賀茂 町々村

りまか

年記

まよる

小嶋与市 殿

求 生本紙

川嶋与市

脇能

賀茂

ワキ次第 清き水上尋ねてや〱 賀茂の宮居にまいらん

抑是ハ播州室の明神に仕へ申神職の者なり扨も都の賀茂と当社室の明神とは御一躰にて候へどもいまだ参詣申さず候程に此度思ひたち候

変茂つと急は　ちら雨ぐらい室の
ぐぼうの曙よりくだつ旅衣色
そむる若ゝ雨のかちぢ行舟をものいふ
雲井やえかういつれ都の山陰芸
賀茂の流居よ客よそく御手
徒やばまこ心よし水のかもの河原より
出るなり　よぐよ頼まべく人のかたも

神すぐらの道おし　なすのばゆく
宮つかつぎさの数更て秋ほどもなきい
御稜川風も涼しきなよる瀬も
まとめる水桶のもら顔すゝねみすみつ
あまど命のほとり早振神よふのゆきに
とぞよぶ身の家居くもぬ心の那
乾世揃ひの池神ようるべのみをとく

まつよ御手洗の声もすゞしき
夏かげや糺の森の梢より初音
かりゆくま観音よりぞ行くて
今一通り村雨の雲もかゝるゆふ
ひ夏なき秋の汗濃くまでも
のきは行とうしく　いつに気成の
世性よ寺中なる事なれ　是は洪

おくりてハ見物申さんと語る
けるうちを手向けて帰る　まゝ
うらなき心はめつは見は播州室君
明神の神獄のたうとかりしめて
参詣するにまいりてはた成けるとを
されバおさしく壇をつき白木綿よ
白羽の矢をたてゝ割へ渇仰のまこと

かくしおきしハいつも何と申たる事
うく作りて　梅ヶ堂の明神より
しも稲荷ていつやよ見あれ御矢ハ
當社乃大明神とも御神祖も
此大夫のはなかなかさゐ有るに
事あつても満行中々あ作へ
早蔵宮大カ稲荷いろうれ梅ヶ宮社乃神
秘よとねく様をかりぐきに為にあさくそ
此矢乃大猶毎く語り出しぬ
具して神乃所るのをおさく数ハ申
さねたおろく一義をももへし音此
加茂乃里よ秦乃氏女とりしく卿か
夕なけい河邊よ出て水をくみ祈り
手向きるうあり附けるより白羽矢

ちつ流されまゝ浜に楯を屋とせ
およそ婦人竜の形となりぬるをも
ち懐胎し男子をまうけ其子に家と
申しけるがしばらくして父をたづね
其父をたづねて向ひしに其父則あらはれ
雷(イカヅチ)となりて天にあがり神となりければ
いづらの神となる　上　其母も又神

かゝりて後はこゝの神女さらにや
シテ　ありやうをばしらざりしの誠の神秘は
愚なる　うへよりさまへるいふよしは
去る御やたまの人の浅き御代を
像を白羽の八百萬代の神までも
筆に跡を心なり　継ときまければうり
かゝるや梅と其矢ハのびゆ女よりのべまの

世はさらぬ矢返も浮沈なる紅
裙ハめ子よ　実うく不審し給へども
隔たあらじげるも　こゝろかはりて
もとも濁るを　同じ流の様とよ
賀茂の河瀬もかはるなる　たゞ白川
上なかをし河　又異なるとも　かゝる
名の石川や瀬見の小河のきよきを

きんく月をなずみ秋をたつゝて
どうしも濁るを同じ江の流うらぬ心
とて竹陰の月やさき弟の矢尻ちやく
もろこしの隠すとも論るぬかりの
水流をへうとつきて緑をねぞて空の
まきえいたくさくまめよく

上羊地　指吟
●くみ子や心をしりうりて賀茂の河瀬の

ゑよいめ中成河なる流しや行くらむ
岩根松がねをのづから瀧津流れは
ちらむりぞとゞめ水や貴船川
水もなすくみし大井川ぞられ鞠の
雨とみつ嵐のこの戸無瀬なる
波もえんやなつれ流し清瀧川の
水くまい高根のみゆふさくらぬゆかり
引日まちめくのみよ くまの高嶺の
瀧浪は うきてかゝるの雲との上
戴く楠を おのまへと那智とあれ
尭くつかうも同じ跡おさきよみの
日も夢の現ぞとつらつら数へみなる
蜀山よまくぞ水山とよの非のころ
くまみよ非来にのみよ 宮の前瀧

なるすれハ私にも妻語り給ふべしとすゝめいつ
成人申し 二上り 卿といへ今ぞあらはせ
なん母の恩や非道よともも山より高へ海
の君も守る身の恐非徳を苦しみ
せんと歎きしを 上 ありしや我海より
の真をあらはさいは様やおもさいまよ
思ひなる心ハ計ハあら悔まやと

なる非ぞとゆめでまよ立まぎれ
て非がくるわよ成よまりや非がられよ
なりしをる 出端 天女上 甚吉様のおりをやお
我死にやかよ地をもあらし法界無縁
の為生をだよ一子とたしぼうなるかハ
とごおやの非徳あふくなしやおくも
ぬ御代を守るなるも まじくへし

さくべしや。かゝる君のめぐみも今此花
時つなりけりつる。感應あれば
影向微妙の相好荘厳まのあたりみ
ありがたや　賀茂の山すゝみどりの
うきぐもうつりかはらのまで
水よびてどゞころ。しだくを
うるほす折しも山河草木動揺して

まのあたりなるわきいかづちの神々ま
現じ給へり。神も見王城をまもる
君住の道すけ雷の神なれども
あるひは諸天善神となつて塵寰をまもり
現ずし　又は國土を霊法の方便
和光同塵結縁のもとゝいつくも稲の
御事やあか　風雨随時のこゝろれ

雲井ひゞく　鳴雷の雲きりを
うがち　光いなづまの稲葉の露
にも宿るほどろ〳〵ほどろ〳〵と鳴雷の
雨を起してふりくるあしおとは
ほろ〳〵　とゞろ〳〵と踏みとゞろかす
とゞろかす神乃鼓の時も至れば
五穀成就も国土とも豊し治まる

時よゝ此神徳と感じたてまつり
たちまちにして御祖の神は糺の
森みなびきしいまゐへをさすら
ふみや雲霧をおしひらき鳴神も
あめちよりよじ別神も天路よりぞ
のぼつて虚空よあがりき給ふなり

二番目
勝修羅

田村

曲出初二ノ拍子　位早立
後一拍子トル　位軽強

次第　和

鄙の都路隔て来て九重の春に急がん

是ハ東國方より出たる僧にて候我未都を見ず候程に此春思ひ立て候

ワキ上ヘ又ノリ

時もはや弥生半の春乃空くかすみも長閑にめぐる日の影霞む方や

山颪乃響音も静なる清水寺なり
花のまきりく▲急ハ頼みし花ハ都
清水寺とうやまきにん是成桜乃
盛とみえて行末を待て妻戸やと
思ひ作るの手向とかや
きみ地主権現乃花盛　それ花の
名所おほしといへ共大悲の光色そふ
故に此寺乃地主の桜にしくハなし
げにかやの大慈大悲の春の花十悪
の里に香はしく三十三身の秋乃月
五濁の水に影清しちや早振の
御庭の雪なれや白妙に雲も落
うつろわく何れ桜の梢とそ見ん
渡きはや一重まよ九重乃雲の空

かうしの山のはをつらく時をとゝゆる
気色かれしく・〔ワキ〕いかに是なる人に
尋申べき事の候〔シテ〕此方の事にて
候か何事にて候ぞ〔ワキ〕見申せばさいつる
玉箒をもちて木陰を清め給ハ
花守にて御入候か〔シテ〕さん候是は
此地主権現に仕へ申者なりいつも
花の比は木陰を清め給へば花守とや
申さん又宮つことや申べき何れにしよ
よし有者と思しめせ〔ワキ〕実に由ある
人にて候先当寺の御来歴委しくかたり
給へ〔シテ〕抑当寺清水寺と申は大
同二年の御草創坂の上の田村丸の
御願なり昔大和国小嶋寺といふ所に

けんしんと云沙門正身の観世音を
をがまんと誓ひしに有時こづ川の川上より
金色の光さしけるを尋ね登りて見れば
一人の老翁ありかの翁語つていはく我は
是行叡居士といへり汝は一人の檀那を
まちて伽藍を建立すべしとて東を
指てとび去ぬ行叡居士といつぱ
是観音菩薩の再誕まつ檀那とは
まさしく有し坂上の田村丸。

小謡

上哥
今も其名ぞ流たる清水のふかく
おほき誓もあまねくてまもらせ給ふ
誓ひ普くて国土万民をまもら
いしの大悲の数千手の誓ぞや安楽
世界よりぞ此娑婆に示現して我等が

為乃観世音なれバくも置かへしやく
千比面白き人よしありなひてハよへを
渡せたるハ皆名所にて除ハ数々
さても作名前ニてんじ書る数々し
先南よ東て塔婆乃みそてハいかなる
所ニて作そ　あまらる寺乃中山
清閑寺今熊野迄みえて候　まゝ

みな箇つく入逢のかねハるいのあ者
清水寺にて候　あまるうたこゝ出
見よ乃たの寺やに賢き人音羽乃山の
嶺より出る月のかゝやきて浮堂
春桜よりつる気色まさそ花
ぐすあきも　宮る見る眺もしきれ
ごと四はなの一時　実情出る

春宵一刻價千金花に
清香月に影 まことに千金にもかへ
難き時かや あらおもしろき
地主の花の気色やな 桜の木の間に
もるる月の雪もふる夜嵐の誘ふ花と
つれてちるや心なるらむ さぞな名に
おふ花の都の春の空 げに時めける

粧ひ青陽の陰みどりにて風長閑なる
音羽の瀧の白糸のくりかへしかへしても
面白や有難や 地主権現の花の色も
ことなり 頼め頼め 標茅が原のさしも草
我世の中にあらん限りは御誓願
濁らじものを清水の緑もさすや青
柳のげにも枯たる木なりとも

まのうほひいつくの書もてあそびて
長閑き数多の卯の天も和らえつゝや
面白のまへや書だをしろかるへ居
上キン
音羽や瀧もとみゆるは人あらぬ瀧
の其名めでたし人の見ん いつも音羽や
其名も白雲の松をたし 海は清水寺よ
下
行ゆく方と見わたせば
比
行るやいつくの
がきのまちわひ稚児の寺の門だつをも
知らぬ山中よ 日 たまつまくらずきをひ
給ひ秋ゆく方と見わたせば地主権
現の前かたもとみえてかゝるは
きく坂の上の田村堂の前をうちやりの
むら押あまてうちまはしてくる
内陣よ入ますそり 良うしよろ敬
侍読上ヲ 史聞語

や桜乃陰よ稚く花をしたふのち
法乃場ぞ照る月の影となる経文を。
讀誦せられし有難乃御経
やか清き寺乃鐘律浪まと一河の
流を汲ぐ他生乃縁にかゝる樵人ぞ學
をかしき吾色の讚誦是ぞ則大慈
大悲乃願ぞ擁護乃結縁なり

きやかな花のさかりよりやさしく男御の
人乃なさけにはめづらしく人々ほまれを
今にいにしへの一つの山べに仁王五十一代平城
天皇乃御宇に右のほとり坂のうえの田村丸家
東をたいらぎ悪魔を亡ぼし天下泰平
乃忠勤を尽くしも則当寺は佛力なり
坂上君の宣旨よりは撰別してかれ悪

魔を之ばの都鄙安全ならべしとの
依つて軍兵までの防に赴く
時節なりとて此観音乃仏前にまいり
祈念をこらし立願あるよ　一きの
瑞相あらはれハ叡比嶺の頼豪を
かく山ぐいさ出位よ於立々音美
乃下車ものらいくく主地よりさる

や頓てなましける関の戸ありて相坂乃
山をこゆればうらの粟津乃海やうま
ろふ乃名山寺をかしたかミえも清水め
一佛を頼みあひ南ハ路や粉田乃長
橋かゝりし狗も見えなかゝやいさん
跣よ伊粉路乃山ちつくぐる馬乃首道も見え
かきしとぞつえ乃々きまろ梅かえの花も

〽堂塔も色めきてたなびく心おもしろき
去もまた我大君の非国をとゞめ
観音の御誓ひ仏力といひ法力も猶
ねとよまひらさずまつとはさらてさを
去らの鈴鹿のみちはきしせきまでも
思へば佳例なるべし　去程に山河を
動かす鬼神の声天に響き地に満て

●拍吟

萬木をいからし動揺きういつし鬼神も
猶よきは音もゆるがせあらはる

●仕舞

かゝりける逆臣は住へし宅も王位を
背く天罰にてさすがも捨れば忽ちに
うきせきてやまらがき鈴鹿山
上
振放これは伊勢の海なおも松原
村立多つく鬼神は黒雲鉄火をふらし

じつく投よらせと哀して山のおく

みかんしたる扇よあれはとみよし

きうやおびく味方の軍兵のきらいの

上よ千手観音の光を放つて虚空よ

夢行しぜ千の御手毎に大悲のゆみは

智恵の矢をとつめて一度に射せばその

やさき雨あられとふりかかつて兇非の

うへに乱れ落ればごとく皆矢先よ

かゝつて兇非な鬼らば射もよろ有

難しくや誠よ呪咀諸毒薬念彼観

音のちからとおち捨てもかへつら還着

於本人則還来於せし人の歎いたびよ

まつ是観音の仏力なり。

佐和淵

うき舟

曲出一ノ程ノ歌
佐狂口傳 居

ワキ
是ハ諸國一見乃僧にて候我此
頃ハ初瀬にこもりて候ひしか是より都へ
のぼらばやと思ひ候 初瀬山ゆふ
こしくれし宿もかな檜原乃外
乃三輪の山しるしの杉も立わかれ
嵐と共になすらへのおもかけ伴ふに

ほどもなくご殿のかゝりやあしきやき
ぶらの里みも見まなもしく
詞
急て猶よ見へちやうち里わ付ては
揃く伴ひ前をも詠申さうん
深つゝ船の上は峰を据まつき紀
ござぞうれこゝろは心の科ぞとてぞ
あをかゝらかりいもなし　まことゝぞぬ住

家はうらの橋もくなたちらぬらかし
思ふの事ば城もこの露をきゝおかりし若
ゆく来も去て風ろがゆのころを歎く
なかけゆかりくよ行りかあなすさうろうま
雪の山　月日をもうきまよ行も淋のつく
袴よいの夕を荒かあひなへ頼こそかき
てらし縄なすらくや女かも捌らまく

めでたき見えあれ女性よ寧やへ念有也人
此方乃事みて外の何ぞみぞくぞへ
こゝらの里々をめでぶみし人
めでたる人乃楽を経てぞそくう里
御ものなりける人　可よかまえんく云
ぢやしきの方みゝくたぞ無き事をも
きくひん哉なすがみしへ此方よれ

学舟とゆるしの楽を行なさも也同じ
女の方あわるも教えもわくねぢうに方
あまきハびうてがさまちく定ゐまかす梅
ねざさい　言へ宗氏の物語捨ぞよ
たゝねとの堪乃ぞられさへ添べきい海
ほまいみざるよ強いなをすよ　よか了
哀れ事しと男ゟみや里のくをまいりを

この人も社あればさのみ行と申候者
上哥
さなきだにまよひの道へかゝるべき
橘の小嶋が崎を見渡せば川より遠の
夕煙たつ川風にゆく雲の跡や定れ
絶えて山は鏡をかけまくもかしこ
き誓ひもありがたき頼みと思ふな
めやく
下哥
あやなく浮舟のよるの

今は御物語候へ
名地
抑此物語と
申よその事とも始まして此の心廣
まれぞりひていまその縁ある
サシ母
ある母の我もあるなりの思ひし
女をやかうしつ比叡坂より古へ
人あまりよろこびてひさすぎ
故は浮舟母へいかほど中将の僻事よしなし

ゆひくなかゥ人かくもあまつりし伊
ぱさ海うつうてかくゆきのまよひつゝ浮る
しとおひひさかたのあまの川のほとり
ゆるしゆるかきさきちくやまあへの雲文
あし曲ゆく雲にわきて織女やかつほの
いと海なすむ宵の人目を逃してぞ
まかへつゝなる粉しもいとかひなき

しかるはまゝやそのよすがを山住のかづく
霧の海にかけ橋の心よ志ぐれて有明の影月
もとのほうる猶もまよふ水の面も晏わ
なく船のりしてゆくゆく落ちて行の冰
かくすかく道は迷ふとなくしもあるの
うちぬ浦の姿をあきまうとかうは長閑なく
ともなくほどよき思ひ白さへ曙ぬ詠めとなりて

よも深き罪や増りきしなるかくよ思ひ
すひ沈世に在くもあらさやと歎きし
末なき身なれくて終にはしなくなるよ
きかしく　シテ詞　浮舟の御事は委く
承りぬれはくしは身は何所に住人そ
女詞　是まて此所ハ仮に通ひおもはせ
まゝ其後の栖ハ小野の花都に侍ぬひ

給へ　シテ　其ハきやうとも申しとふむ
あさらよ作は梅小野あとくハ誰とう
事やらん　地　かくれなき身の大ひえの
杉の木あらハなる横川の水の淀
かさぬるえ人と書給ひし　シテ　理の
きみ身よそひやもしるあしあるとも
なかは法力を頼みならつかれなてから

上哥

申すまでぞ立つ雲の袖をおくれ方
志し成まはしく　宵　かくて小野に
来ぬるものから隠くと宿とも住まんとすれは
所なき人か野なれは尋ねくる者の枕に
理やさようひの袈裟よ経も衣も御跡をと
かなふやうく　なき数の縁ぬもに
あり横川のよる人の定めぬ浮舟の法の力
と転ずまわれまじや我は浮舟の
よしあるふるまてたうよふまへ紀を
かく思ひわひ此世を捨つるもおもふやとぬ
音なふ更けて人皆寝たりしよ
妻戸を明け出でしに風すさまじう川
浪あらふ聞えしに独りあはれなる
ついさまよひゆくと思ひしより心もそらに

ゆきてくだけるさのことも なく
秋かのきしきも浪まや はましや
あらしやあらされの 小鳴は なしは
かなしと 沖うき舩ではるかきぬ
大慈大悲のことのみ女なむる
まれどこにようわごころさまぞこう
まよおもくは世る日の影もとうねがり

かくはふぎんに 壱まくまよのかくては
の女かへ かきくたのこしよき 頼まれ
観音の慈悲く 初瀬のちとうらを横
川の僧都に見付られ行く小野に女
おひ所里か持してそのまきれそしも
長文の女よまの年くろ二へたひむすや積
川の杖のかなき事とも夢よかられ

見し夢の今此宮をしたひたちまよよ
ちかひをまもらんと思ひしよおもひあまりよ
執心のはれぬ都率よまよふ所しきと
いふかとおもへは明る横川に云ふかと思へは
明るよりも松の嵐や朝(?)…
松風ばかりやのこらん

次第

和

蝉丸

曲出一ノ程陰
位閑居

定めなき世の中々に憂き事や
頼みなるらん 是は延喜第四の
御子蝉丸の宮にておはします げにや
何事も報あるうき世の前世の
戒行いみじくて今皇子とは生まれ給へ
ども襁褓の内よりなどやらんあ

眼盲ましてはてしは月日の
光なく闇路よりこを晴らでこ
かうの為もやむすあ　明くら
ありきたる風よ常めの成数まや泡ん
ひかりよると見し日より峰逢坂山よまて
直ち御ぐしとおろしまれとの綸言
せきくうへとねいは痛りつきいる限りおくれ

ども動かれわかなく　足よは車
志のび路と雲井のよそにめぐらして
や深目乃窓も名残の都路をとくきふ
出うめてよいつ帰らんとも分かぬ泉の
よるべなき身乃行末おぼつかなさよ世の中は
ほまのかめのうしとてもうきの国
路たどりゆく遊びの雲もかゝらのほる

逢坂山にきこえしく めすり
清貫 御前に参 御髪を剃の
山にして直へきの 御作宣旨
承りしに是は延喜の御位にてたへ
ひらに捨をき申へきやうなる事あらく
も我君は先帝より御国を治め
民をあはれむ御めぐみの

数ゑ思へ行とやたる治るや浪の衣
思ひもよらぬ作りし 有る身の
清貫がつひりやおなじ盲目の身を
まろく事な世乃ひきやう悦世
ばきは父帝も山野に捨給ふ
ば情ありさは紙たまきを迷ふる
業障を果し後の世のたすけとまし

御いのりことに社壇の親の為進よ玉
あまくまりの勅宣やあ　宣旨よ
てん須よ御ぐしおろし身を作
是ハ行とうひたるかう　是ハ佛
出家とそめてかきはくるみそてわかる
きぬの山　宮やしろうつしんまうひと切
おつハだんよ枕もと唐土のきいしゃ

そもかゝる浮乃海よそて有まおざうや
汝は名ある人よそてハ中ゝ浪人の身なれも有
へまかれハげ衣をおつくミ乃とふものを
まつまよん　是ハ為まかたミ乃く
鳴ようミ直つゝみのと云あり　まさ雨
露乃御為あれハ雨しも笠ともあら給
是ハミありつひみさとやせてよう直

修行笠とハおもよまふ　又此桜ハ仏道
志る人の仏手よもらいまだ見へし　宗で光
もつかりよ手華乃坂とも越まのまと
ば扁遍照かゞみし校ゝ　丈やちともの坂
ゆくつえ　家ハ前も逢坂山の　関乃
戸指乃かきのや竹乃　つえ柱ごも
たのミつる　父帝よハ　捨られて

上
内ハくら浮世よあふれゝ乃知もまつぬかも光
みよりや延喜乃皇子乃御乃果つられ
しき行人　伝馬乃うすくよろ下里
乃様衣袖をまほりて村多のかう捨
かきまえ給かが　くずるそのうりを
ほうよ有明のつき履と押へつぶや
ゆうちりよ御あまきハ皇子よあるかまよ独り

げにまことおもそて琵琶をひきまく
枝をさらす所まろびてぞ涙なく
是ハ延喜第三乃皇子さかがみとハ我
なり我皇子とハ生まるれどもいつの因
果のゆゑやらん心より狂乱して都を去
辺郷の狂人となつて翠の髪ハ空
さまにおひのぼつてなづれどもくだらず

いかにあれなる童部何を笑ふぞ
何我髪乃さかさまなるがおかしいとや
げにさかさまなる事ハおかしいよな扨ハ我
髪よりも汝らが身にて我を笑ふ
社さかさまなれ面白し面白し是ハ皆
人間目前乃境界也それ花乃種ハ
地にうづもつて千本乃木末にのぼり

のほり月乃数ハ天ニかゝつて萬水宿れ
底ニ沈ミ是おもしろき佳節たる頃と
見渡なりといひし秋ふかみ侍る音
ずきんよそてり髪ハ子上よりわひ
のほつく星霜とてくえし皆頃
渡乃もろ川なりけりろや
髪もも風ハ撓よ
風まもとらんと
柳乃

仕舞拍子

来ニもあられす　かおそくもとうき
ての旅　たらうの舞やおまし座
花乃都をたち出る　くぷうき旅ニ
おくの舞苑やも白けもとうち
わくり栗田ぐちも来し　かく今宵
誰とか松坂や関乃ものと思ふよ
跡は波なる音羽山のなお猶すしれ也

や松虫すゞむし蛬乃鳴や夕陰の
山科の里人もこゝをよぎれど
うろちの清瀧にこそ知へしや逢坂乃。
関の清水よ影みえて今やひくらん望
月乃駒のあゆみもまつほどあるぞ
井のかまえは我なからはやさひ
とゞろかせ載き傀儡も見んとすゝろて

寛ちうの乃歌ぶしとみとらふ
浪乃うつゝかの秋姿や第一第二の
絃なちくしとして秋乃風松もたつ
てうしたかげ第三第四の宮さうまれ
蟬丸がきこえも四乃絃かなでさまに
村雨の音も慈悲心とぞおもふらんや那
世乃中はとてもかくてもおなじことへし宮も

わりやも果しがきれバ　地ハ　かきやお
見ゑまうやうらまもぞうもと
まさがき琵琶乃音やぞころれ
鎮の賤が屋にもがくる芸人の有なる
よるぞみよつまさおとるや読んでよまろうし
きゆらしてずるやの手乃見音を数
でびかかよ立より呼居たり　〽望るや

此まるやうとそよ音すれバ琵招く
訪らうれつぶくがう三位そてまゝ　地ハ
迎つき拝もよろしく呼ハ弟乃官弦
専成ゆわあゆきかりそん乳まり蝉丸
おこらつまゝまゝ　地ハ　何かりて丸かそろ
姉家のと謎きそまるやうかしあくぢい
行を涼ましきはゞ首様　〽まよ三よ

みをを尋ぬらし 弟乃宮と 姉宮と
世をもはなれてゆづりつきの 鳥も 移して
なく逢坂乃ときにあへぬ 御位ぞよ 御や
さほとなん ちよきんだよろづ代の
かすみぬるやつりまつてや 一樹の宿り
さりてぞ 風に花乃香もとめて ぞ花も
つま紅枝とりや 嘆くはさやうら

さやうきんりやつくり里たてくいまふ
應神天皇乃御子の菟道宇治
のみことだひとつ御位譲りの花咲り
ばこ是連理乃情とりや 舞いつ袁の
きさきの宿の花思ひはよりやの
うらの一曲あくれかくうたふて 君が
宮乃もとよ ひらきて實よ。よろづへの氷れ

はばかりさりし契りかれ此ま末世まで
いかさても日月の地に落あらひを
思ひよ我らいかなれば王子を出し角
ありまじ出そ侘たまはりて惑井の里
ともまてひまらくでひ土境の狂人路
頭山林の賤と成らぬ島去振人の様に
を頼みまりかりまするても此上邊辺

玉楼金殿の床をまずて尽きあの
御ひきかへてまかるを遠方のみと
ちく竹の柱に茅の垣のさも麻も
まからめすまるやの庵よりも室て
おきてもまちらむける昼そいるへの
錦の衾はおもくもなきしまくこと
とおもそいかにまつるを猿のらぬ

袖をしほるゝ村雨の、ぜきあへて
琵琶の音とるを、ひきならす我
詩をもなく藁の雨たれも音もあら
やゝ行のひまくよ村雨ふかうら
めでみる事の叶はねば思ひまさる
面をふるまひそやの藁屋も思ひ
やらわく痛りや、身は藁屋いつ

迄もぐん弱の更よ盡まし暇申て
蝉丸一樹の陰の宿りとて、それまさ
有まして互ぞうとの名残おしき
ござるを思ひやあら經へ、宮痛りや
秋なからゆくうたすさびかりしもあ
留るとゆうとゝ雲の立やまひ
て泣居たり、あくや関路の夕がらし

げにや心はうき物の　我里ならであく
てゆく　旅路をとめよあふさかの　関
の松村すぎゆきまは　人待ごとくなる
まくよ　わらやの床よ　ふしてなく　霜こほり
ひとりねはよ常よりもなを袖のかはく
かよ毛のもろほどを吹たる風の
月直く　涙ながらに　おもかげもなく

ゑくち

ワキ　是ハ東国方より出たる僧にて候　我未都を見ず候ほどに　此度思ひ立都に上り候
思ひ立心ぞしるべ雲を分　舟路を渡り山を越　千里も同じ一足に
夕を重ね朝ごとの　宿のなごりもかさなりて　都にはやく

急ぎゆく　急ぐ程に是ハはや
都に付て候此所をは六條河原の
院とかや申候休らひ一見せばやと
思ひ候　月もはや出汐に成て志ほ
がまの浦さびわたるけしきかな
陸奥ハいづくはあれど塩竈のうらみ
てわたる老が身のよるべもいさや定め

なき心もすめる水の面にてる月
なみをかぞふれバこよひぞ秋の最中
なるげにやうつせバ塩竈の月も都の
最中かな秋ハなかバ身ハすでに老
重なりてもろしらが雪とのミ
積りぞきぬる年月の〳〵春を迎へ
あきをそへしぐるゝ松風の迄も我

身の上と汲くる塩なれ衣袖寒き
浦わの秋の夕べかな　めすみ
是なる尉殿御身ハ此あたりの人か
さん候此所乃塩汲にて候　ふしきや
爰ハ海邊にてもなきに塩汲とハ
誤りたる尉殿　さて此所をば
いづくとしろしめされて候
此所をは六条河原院と承りて候
河原院こそ塩竈の浦候よ融大臣
陸奥の千賀の塩竈を都の中に移
されたる海邊なれバ名に流れたる河
原院の河水をもくめ池水をもくめ
こゝ塩竈の浦人なれハ塩汲となと
おほさぬそや　げに陸奥の千賀の

塩竈もこの所より移されたる事承
及く作り梅か枝の籬の嶋ぐんの
さ香も此の音も社籬の嶋ぐんよ融大臣
常ハ御船をよせて御酒宴の遊舞
様々成し所ぞしや月社出しくへ
実々月乃出て汐そうやおうの籬の嶋の
森の梢よ鳥の宿し囀りて四門よ

うつる月影迄もこしうよ帰る身なれ
ムかとぞ思ひ出られては
何と唯今の
面前の気色を御僧の御身よ知ろしめ
さるゝも賈島の言葉やらん鳥ハ
宿す池中の樹
僧ハ敲く月下の門
をすもたゝくも古人のこゝろ
今目前の秋暮にあり
実にや古人

も月よるの夜の塩竈の浦ゞの
秋もなかばぞ松風も立よる景の
籬の嶋がくれいざ秋をもちろう
昔名跡を陸奥のちかの浦を詠
めしやう千賀の浦の代詠し　塩竈の
うらを都にうつされたる謂れを語る人
嵯峨の天皇の御宇よ融大臣陸奥

千賀の塩竈の眺望を聞しめし及ハ
此所に塩竈をうつし　あの難波
のみつの浦よりも日毎に潮を汲ま
せ爰にて塩をやかせつゝ一生御遊の
便りとし給ふ然れどもその後は相続
して翫ぶ人もなけれハ浦は其儘
干塩となつて池辺によどむたまり水

水ハ雨乃残りのふるき江に落葉散
うき松陰乃月たにすまて秋風乃
音のみ残る計なりされハ哥にも君
まさて煙たえにし塩竈乃浦さひ
しくも見えわたるかなと貫之も詠て候
なりけにや詠むれハ月のみみてる塩竈乃浦
うらさひしくも荒はつる跡乃世迄も
しほしみて老乃波もかへるやらん
あら昔恋しや恋しや恋しやと
したへとも歎けとも甲斐も渚の浦千鳥
音をのみ鳴計なり音をのみ鳴計なり
さて見渡りたる山々ハ皆名所にてそ
候らん御をしへ候へ
さん候皆名所にて候問給へ教申候へし

ありかしなるみよし野山の さくらは
あれなる吉野山よ そとも山ぞなき
はつ相坂の關のこなたは北と號され
おひら山も經道ならで 信の
ちらく開のさわばみと讀まれても
ばうてはあうみ路の逢坂の山なる故
峯に隠れて比良のみえぬなり

後ろはひえの嶺つゞきまじはるくのやま
あまたの名所くと語り給へ 語りも
あさし言の葉のすゑ聞えし中山清閑寺
今熊野とはあれぞかし 柳其まゝ
ゆきかふ里一村の森のうらぞ それ
さる人に語きよまゐらいはせしかれの
秋なればや紅葉もあかきい稲荷山

風も音ゆく雲のその梢も色づきぬ秋
の名 今こそ秋よなかしかみだれ咲
花の香の萩の毒 緑の空も陰まさり
野山みな色づく里はいつも あはれなり
ゆふ時雨 野辺の松風 かすり
音そへて 鶉なくなる かた山より
木幡山 ふしみの竹田淀鳥羽も見えて

ながめや詠めやあかぬ景色の里はさら
雲のかかるや音羽山の嶺もこそ
さも見えしはいつまで雨もふらぬに
あれなる大家やどころ山もと紅
尽きぬながめつつあかぬ田や
やすらひまでも秋の風吹かば嵐
ゆきゆきて行くぞ 秋も早

秋ともなしや須磨の松の嵐山も
ひとしほ更行松の夜のつらさ
浦のほとりの月影に汐と塩路をたどるや
さらそ隣もそてる月はめで興学
雲しく あまてらす見る秋の
夜の浮かれ踏よすやえいさや塩を
あまんどて持や田子の浦つまかく
汐の塩衣くめ月をも袖よする塩
の汲み浦浪よするの老人と見し
海の塩屋にかいまきまさて跡をみし
海よりは袖もの憂きを汐まそ
磯枕苔の衣をかさねて岩根の
床よ夜をあかし千鳥もなき跡あ
こそ須まつ松の松の寝すかく

忘れて年も経しかとも古へにかへる
浪の音塩竈の浦人の今宵の月を
陸奥の千賀の浦とも眺めんぞ其
名所の数々なりまうちきみ融の大臣と申し
事なりけれ塩竈の浦をうつさせ
あの籬か島の松陰に明月に舟を
浮へ月宮殿の白衣の袖も三五夜
中の新月の色も千重ふるや雪をめくらすの
雲の袖さすや桂の枝々に光を花と
ちらす粧ひここにも名に立白
川の浪のあら面白や曲水のさか
つきうけたり〱遊舞の袖あらおも
白の遊楽やそも明月の其中にまた
初月のよひ〱に影もすかたも少なきは

きこいのなら謂ある謡まこれは西當ま
べ白日のいまだ逃されば其影を隠さらく
あらへば月のあるよる星のうへきいり
ちくあり 青陽の春のもしめよる
霞をゆくへの春山 健の葉をみい
月の 影を舩よりもあかりたりまるの
氷中の遊魚るゝ つまうとしかい

雲上の郭公ハ 弓の陰をもわどろく
一輪も降らじや 萬水をも分かる 鳥ハ
池の樹に宿り 魚ハ月下に吸ふは
閨をあり秋の夜の 鳥もしない 鐘も
やすて 月もるや 影かふきく明
方の雲と成り鳴とある光も陰ける
られく月の都よりの影よりは白露

ゑ我もの面影やおかろたしれの面影

右百番者観世左近太夫當流
以章句本寫之并秘蜜拍子付
尚加吟味改正文字板行者也
元禄三庚午年九月吉日
寺町通二條上ル町
寺田与平次板行